

OCLC Asia Pacific Regional Council Meeting, September 2010 (OCLCメンバー評議会アジア・パシフィック地域会議東京大会) 開催報告

今村 昭一 (図書館調査役)

2010年9月6日(月)、7日(火)の2日間にわたり、標記会議が早稲田大学27号館小野記念講堂において開催され、日本国内からの参加者約60名を含むアジア・パシフィック地域(中国、香港、台湾、韓国、シンガポール、タイ、オーストラリア、ニュージーランド、米国)から115名が参加した。

また、アジア・パシフィック地域会議第1日目の終了後、27号館2階206教室において、国立大学図書館協会および公私立大学図書館コンソーシアム(PULC)加盟館を対象とした国立情報学研究所(NII)主催の“CLOCKSS 1 hour meeting”が開催された。

9月8日(水)には同じく小野記念講堂を会場に“Workshop on Metadata”と題して、メタデータのあり方を考察するためのパネルディスカッションと討議を中心とするワークショップが開催され、国内の大学図書館関係者を中心に100名を超える参加があった。

会場を提供した早稲田大学図書館としては、これらの会議への図書館職員の参加はもとより、OCLC関係者とのWorldCat Local、メタデータ等に関する意見交換会や中央図書館のライブラリーツアーの開催など、各国の図書館からの代表者を迎えて多岐にわたる交流の場を設定できたことから、多くの知見を得る貴重な機会となった。

・OCLCについて

OCLC Inc.は、情報へのアクセスを促進するために、1967年に米国オハイオ州で創設された図書館相互協力を目的としたメンバー制の非営利団体である。現在、世界171の国と地域の約72,000の図書館が参加・利用している。過去40年以上にわたって蓄積された共同目録WorldCatは、世界最大の書誌データベースである。

・OCLCメンバー評議会アジア・パシフィック

地域会議について

OCLCでは、従来、年3回OCLC本部(米国オハイオ州)に各地域代表が集まり、OCLCの方針について討議していたが、各地域の要望をより濃く反映するため、2009年よりアジア、アメリカ、ヨーロッパの3地域に分かれて討議を行い、その後、年1回OCLC本部で全体の方向を決定していくこととなった。このことから、第1回アジア・パシフィック地域会議が2009年9月に北京で開催され、翌2010年、第2回会議が東京に舞台を移して開催されることとなった。なお、第3回会議は2011年秋に台北で開催される予定である。アジア・パシフィック地域には24か国、およそ5,000機関が含まれている。

・OCLCメンバー評議会アジア・パシフィック地域会議東京大会

今回は“The Library in Support of Research and Scholarship”(研究、学究活動を支援する図書館)を全体テーマに掲げ、Web-scale management services(OCLCによるクラウドサービス)、デジタル化およびデジタル資源へのアクセスに焦点を当てた内容となった。

第1日目は、加藤哲夫早稲田大学図書館長(当時)およびVic Elliott氏(OCLCメンバー評議会アジア・パシフィック会議議長)の開会挨拶に続き、Jay Jordan氏(OCLC代表)による基調講演“OCLC update”をはじめ、日本からは、国立国会図書館長 長尾真氏による「電子図書館建設と知の共有化」のほか、「日本における大学図書館の連携とコンソーシアムの現状について」 中元誠氏(早稲田大学図書館 事務部長)、「アジア・パシフィック地区における学術情報の流通と書店の役割」 十河宏氏(紀伊國屋書店パシフィック・エイシアン地区 総支配人)の2つの講演があった。午後は、

Victoria Reich氏（スタンフォード大学LOCKSS プログラム代表）の「CLOCKSSとデジタルアーカイブ」に関する基調講演のほか、以下の3つの報告があった。

オーストラリア国立図書館から「一般利用者のコレクションへの関与：デジタル化された新聞資料及び、その他のコレクションへの注釈・校正プログラム」の取り組み、中国からは北京大学図書館より「クラウドコンピューティング：中国の視点」、香港からは香港大学図書館より「香港大学におけるデジタルアーカイブCONTENTdm」として、それぞれの現状や課題の報告があった。

第2日は、Matt Goldner氏（OCLC 新サービス、技術推進担当）による、OCLCのクラウドサービスWeb-scaleに関する基調講演に始まり、前日に引き続き、アジア・パシフィック各国・地域（韓国「KERISとKERISの提供するサービス」、ニュージーランド国立図書館における電子遺産蓄積事業（NDHA）等の事例、そして台湾からは国立台湾大学図書館より「文化遺産のデジタル化」）の報告があった。午後はまとめのセッションとして、OCLC理事会、OCLCグローバル評議会、OCLCアジア・パシフィック地域評議会「あらたな黎明期：OCLCアジア・パシフィック地域評議会の誕生」の3つの報告を経て、オープンフォーラムへと続き、Vic Elliott氏の閉会挨拶で2日間にわたる会議の幕を閉じた。

なお、プログラムの時間外に当館利用者支援課職員のアテンドによる、会議参加者を対象とした中央図書館ライブラリーツアーを企画した。急遽実施することになったにもかかわらず20名以上の参加申込があり、大変好評であった。

個人的には、業務スケジュールの都合から一部のプログラムへの参加にとどまり、その点は残念であった。しかしながら、若干、時間が足りずに十分な討議にまで至らなかった報告も見受けられたものの、いずれのプレゼンテーシ

ョンもよく練られた内容であり、今回のテーマにふさわしく示唆に富んだものであった。

OCLCのサイトの以下の場所にアジェンダとともに発表資料が掲載されているので適宜参照されたい。

<http://www.oclc.org/multimedia/2010/files/aprc/september2010/default.htm>

・ Workshop on Metadata

OCLCメンバー評議会アジア・パシフィック地域会議東京大会の開催にあわせて3日目のセッションとして開催することとなった。

午前中は、OCLCからMatt Goldner氏による「クラウドコンピューティングと図書館」（“Cloud computing and Libraries”）、Karen Calhoun氏（Vice President WorldCat & Metadata Services, OCLC）による「図書館メタデータの将来」（“The future of Library Metadata: A presentation for Japanese librarians”）とそれぞれ題する2つの基調講演があった。

午後は、佐藤義則氏（東北学院大学文学部教授）、尾城孝一氏（東京大学附属図書館情報管理課長）より国内の事例報告を受けて、基調講演者も交えてのパネルディスカッションおよび討議が中元誠氏の進行により行われた。目録およびMARCの世界的な動向や方向性について、日本の動向と今後のあり方も含めた考察の場として活発な意見交換があった。

